

最近の症例から (18) —含歯性嚢胞に起因した歯性上顎洞炎—

奥田大造, 田中 仁

松本歯科大学 口腔外科学第2講座 (主任 山岡 稔 教授)

患者: 14歳 女性.

初診: 平成6年12月6日.

主訴: 87 埋伏歯および右側上顎嚢胞.

既往歴および家族歴: 特記すべき事項なし.

現病歴: 平成4年4月頃から閉鼻声を友人に指摘されるも放置していた. 平成6年11月に歯列矯正の希望で某歯科医院を受診した際, パノラマエックス線写真で 7 の歯冠を含む嚢胞様透過像と上顎洞内の歯胚の存在を指摘され, 当科を受診した.

現症

全身所見: 身長153 cm, 体重43 kg, 栄養状態良好.

口腔外所見: 顔貌は左右対称性で右側顎下リンパ節の圧痛, 鼻閉感や後鼻漏はなかった.

口腔内所見: 654 に齲蝕はなく, 電気歯髄診断にて生活反応を示し, 打診痛, 動揺はなかった. 同部頬側歯肉から歯肉頬移行部にかけて骨の膨隆と圧痛を認めた.

臨床検査所見: 特記すべき事項なし.

CT所見: 6 の遠心部に 7 の歯冠を含む嚢胞様像と, 上顎洞後壁に 8 と考えられる歯胚が存在し, 右側上顎洞内はCT値40の膿汁と考えられる液体で満たされていた (写真1).

臨床診断: 右側歯性上顎洞炎, 含歯性嚢胞 (7 部), 87 埋伏歯.



写真1: CT像

a ↑: 7
b ↑: 8

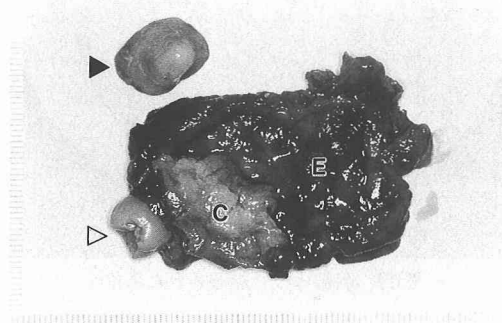


写真2: 摘出物

▲: 8 歯胚
C: 嚢胞
E: 嚢胞と癒着した上顎洞粘膜
△: 7

処置および経過：平成7年1月31日GOS全身麻酔下に嚢胞摘出術，上顎洞根治術，抜歯術を行った。Caldwell-Luc法に準じて右側の犬歯窩より開洞後，7と嚢胞およびこれに癒着していた上顎洞粘膜を一塊で摘出した後，上顎洞後壁に位置していた8を抜歯した(写真2)。通法に従って対孔を形成後，洞内にガーゼタンポンを施し，上顎洞前壁をチタンマイクロプレート（ライビンガー社）を用いて復位固定した(写真3)。

病理組織学的診断：含歯性嚢胞，上顎洞炎。

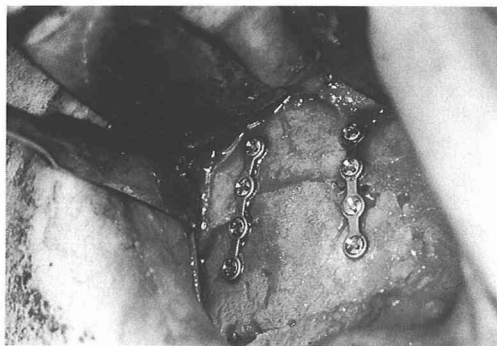


写真3：術中所見
上顎洞前壁をマイクロプレートを用いて復位。